

# 伊豆諸島の旅 2021



2021年12月

旅のチカラ研究所 植木圭二

伊豆諸島と一言でいうが、それらの島々はあまり知られておらず、ましてや全ての島に行った人はそう多くはない。私は伊豆諸島の全島制覇を目論んでいて、今回は伊豆大島から利島、新島、式根島、神津島を目指して友人と旅に出た。

## 第一章 伊豆大島

### ■ペンション「すばる」

私は伊豆諸島の中で伊豆大島（以降は大島と表記）だけ相当な回数訪問している。しかし大島以外の島には行ったことがない。なぜそうなっているのかは、大島のペンション「すばる」の花植えを手伝うために毎年春と秋の年2回訪れているからで、それは既に10年近く続いている。

今回もその花植えの来島で、参加メンバーは私、妻、息子、孫、そして地球一周の船旅で知り合ったヨシさんの5人になる。しかし孫は2才で労働力にはならず、むしろ専門の子守役が必要になるので実質の作業者は3人、その3人で行う作業は約4トンの花壇の土の天地返しと300株の花植えで、概ね1日半くらいの作業量になる。



【ペンションすばるの外観 右に花壇】



【花植えした花壇】

作業の後は温泉が待っている。私たちはいつものように三原山の火口近くにある大島温泉ホテルの露天風呂に行く。三原山の頂上を眺めながら入るその露天風呂は私一押しの露天風呂で、時々私が行う温泉講演の中で紹介することも多い。



【大島温泉ホテルの露天風呂】

花植えの夜はお好み焼きパーティをするのが定番で、そのお好み焼きは私が焼くことになっている。当初は花植えだけだったが、いつの頃か「大阪に2年住んでいた私のお好み焼きは評判がいいから食べてみますか？」という私の言葉から始まったような気がする。

そして今やお好み焼きパーティはオーナーの知人や宿の関係者も参加するようになって十数人集まるイベントになっている。私は自分の焼くお好み焼きが島民に受け入れられていると解釈していたが、大島にはお好み焼き屋が一軒もないという事実を知って、最近の私は少し謙虚になっている。

今宵もお好み焼きパーティが開かれ、私は24枚のお好み焼きを焼きあげた。

#### ■ミゼット

2日目の昼頃に花植え作業が終わり、オーナーの知人がやって来た。特別な技能を持った人で三輪自動車「ミゼット」の修理の達人だという。もちろんそれを仕事にしている。

ミゼットはダイハツ工業が生産販売していた軽自動車規格の三輪自動車で、1957年発売開始した。当初はオートバイのようなハンドルで、キャビンは前面に風防はあるが屋根と背面は幌だけでドアもなかった。全長2540mm、全幅1200mm、乗車定員1名、エンジンは空冷2ストローク単気筒249cc、最高出力は8馬力、最高速度60km/hだった。以降改良され最高出力を10馬力にアップ、キャビンにドアを付け、2人乗りモデルなどが出て1961年まで販売された。

その頃の日本は戦後復興から高度成長期に移行する時期で、その時代を描いた映画「ALWAYS 三丁目の夕日」でもミゼットが登場し、未だにこの車のファンは多い。

そしてそのミゼットを完璧に修理できる人は日本中で彼以外にはいないというので、年に数台直せば年収が稼げるとオーナーが紹介してくれる。

私が旅行関係の仕事をしていると自己紹介すると、彼は「ミゼットが置かれているホテルが石和温泉にありますよね？」と聞いてくるが、私は「いえ、わかりません・・・」と、すると彼は写真を見せてくれた。それは私が先日泊まった石和温泉「竹林庭 瑞穂／旅籠きこり」だ。

私は思い出して「確かにあった、ありましたね」と声を張り上げると、彼は「あそこでミゼット愛好者の集いが開かれて、参加してきましたよ」と付け加える。

世間は狭いものだ。旅籠きこりの昭和横丁には昭和のポスター、家具、家電、おもちゃなどが展示されており、ミゼットもあった。

彼は自動車修理会社をやっており、もちろんミゼットの修理が中心で仕事が楽しくてしょうがないという感じがする。まさしく趣味と実益を兼ねているので非常に羨ましく思える。

もっとも私の友人たちも「植木は趣味と仕事と一緒にあって羨ましいね」などと言ってくるが、私の場合は彼のように稼げない。

私は後輩や若者から時々相談を受けることがある。それは定年退職後の仕事や転職する際にどのような仕事をしたら良いかなどというもので、そんな時に私が言うことは決まっている。それは、まず“自分がやりたいこと”、そして“自分ができること”を列挙して、両方が満足できる仕事にすると良いとアドバイスしている。

ただ大企業や公務員といった大きな組織にいた人たちは往々にして“自分ができること”は比較的容易に出てくるが、“自分がやりたいこと”はなかなか出てこない。それは恐らく自分のスキルの棚卸しは組織の中で要求されるが、仕事は常に上司から与えられるものだから、何をやりたいかを考えることがなかったことが要因だろう。私の経験上、大きな組織にいた人ほどその傾向が強い。

このミゼットの彼は、その2つを両方とも満足させている。加えて“他人ができないこと”というものが入っている。それも極めて希少で彼しかできないのだから凄い。それは競争相手がいないということで独占できることもあるが、何よりも皆から感謝される。だから趣味と実益、さらに感謝も付いてくる。

## ■二人旅が始まる

2日目の午後には花植え作業が終わり、妻や息子は翌日に予定があるので帰宅し、これから私とヨシさんの二人旅が始まる。明日から伊豆諸島を南下して利島、新島、式根島、神津島に行く予定にしている。冬場のこの時期は船の便数が減って、上り下りで1日1便しかないので、各島で1泊ずつ泊まることになる。

さて、大島にはこれまで 20 回以上来ている私だが、まだ行ったことがない場所がある。

それは最近 SNS で話題になっている「泉津の切通し」で、息子の話では大島を舞台にした深夜ドラマ「東京放置食堂」でその切通しが出てきたからだという。

まずは島の北側の泉津地区に行ってみる。

大島一周道路の旧道から脇に入る石段の道があり、両側から巨木の太い根が生えている。これがその場所らしい。私はもう少し規模の大きいものを思い浮かべていたので多少困惑したが、確かに人工的に切り開かれた道なので切通しとえばそうかも知れない。



【泉津の切通し】

さて切通しといえば鎌倉が有名で、鎌倉では切通しは要害として機能した。敵が来ても切通しを通過する時に一列になるので攻撃し易く、見方にとっては守り易い。要害とはそもそも味方にとっては要でも敵にとっては害になることでそう言われる。

その鎌倉で幕府を開いたのは源頼朝だが、その叔父にあたる源為朝が保元の乱で敗れて大島に流されたことはあまり知られていない。そして流された後に大島をはじめ伊豆諸島を事実上支配するほどの勢力を持った。それゆえ討伐されるが、琉球に渡ったという説まで残っている。

泉津の切通しはその源為朝が造ったとするのは飛躍し過ぎかもしれないが、その方が歴史ファンも観光客も喜ぶかもしれない。名称も「為朝切通し」に変更するのも面白い。いずれにしても大島の名所が増えることは悪い話ではない。

尚、大島の観光名所などは旅行記「伊豆大島の旅 2018」を、また私とペンションすばるとの関係は「私の旅史③【ナイスミドル編】」を参照願いたい。

#### ■利島行き

明日は大島の隣の利島に泊まるつもりで、ヨシさんが利島の民宿に電話するが、電話の向こうからは「島に来るのをやめたほうがいいよ。来ても出られなくなるよ」と民宿の女将が言っているのが聞こえてくる。ペンションすばるのオーナー夫妻も「やっぱりね」と言っている。

利島は今回行く予定の 5 島の中で最も小さく、人口も 300 人と最も少ない。三角錐が海面に突き出たような形状で、平らな土地も少なく、宿の軒数も少ない。小さな港がひとつしかないので風向きによって船が着けないことが多い。天気予報では明後日以降は海が荒れるとなっている。

私たちは利島を諦めて新島行きを選択する。利島は帰りに寄ればいだろうと、この時は安易に考えていた。

## 第二章 新島

### ■新島に渡る

私たちは朝 6 時 20 分発の大型客船「新さるびあ丸」に乗り、新島を目指す。2021 年に就航したこの船にはヨシさんはもちろん、私も初めて乗る。私たちは 2 等椅子席で乗船したが、リクライニングシートや個別に仕切れるカーテン、ロッカーなど設備は充実している。船の大きさは総トン数 6099 トン、旅客定員 1343 人で、海上保安庁の大型巡視船くらいのサイズでそれなりに大きい。

この船は東海汽船が運航させており、東京竹芝桟橋を前日の夜に出て朝 6 時に大島、以降は利島、新島、式根島を経由して神津島に行き、U ターンして式根島、新島、利島、大島を経て竹芝桟橋にその日の夜に戻るというもので、シーズンオフの平日はこれらの島に渡る船はこの便のみになっている。

ちなみに八丈島などに行く船も東海汽船が運航させているが、竹芝桟橋から三宅島、御蔵島経由で八丈島に行く別の航路で、それらの島に行くには別に行程を組まないと行けない。

船は新島に行く前に利島に近づく。利島港の桟橋にかかる波の高さは結構高い。それでも接岸し、そして利島を離れて 1 時間もしないうちに船は新島港に着く。

船を降りると小雨が降り始めている。昨日植えた花壇の花たちには潤いの雨であるが、私たちにとっては困った雨になる。というのも新島港から新島の中心地まではちょっと距離があって、晴れていればともかくも雨の中をあまり歩きたくない。

ヨシさんは港に来ていた〇〇会社と書かれた車の人たちに声を掛けている。予約した民宿に行く道を聞いているのかと思ったら、車に乗せてもらう交渉をしている。さすが関西人、いや旅慣れているヨシさんだ。そして見事に交渉が成立、いやこれは交渉ではなく一方的なお願いで、幸いにしてそれを受け入れてもらい民宿まで乗せてもらうことになる。

お願いを聞いてくれた人たちは電気工事関係の仕事をしており、私たちと同じ船で来島した助っ人を迎えに来たと言っている。シーズンオフのこの時期は彼らのような工事関係者が多いようだ。

### ■新島を自転車で散策

予約した民宿のチェックインは 9 時、今がちょうどその時刻だ。1 日 1 便の船が 8 時 45 分に着く。のだから当たり前のことかもしれないが、ありがたい話である。

チェックインして街に出ると、街並みは大島とはずいぶん様子が違う。古い島の伝統的な建物もあれば、お洒落なカフェもあり、古さと新しさ、そして外国文化も同居しているような感じがする。

島のあちらこちらにはイースター島の“モアイ像”のような“モヤイ像”が立ち並んでおり、実に不思議な光景だ。モヤイ像は抗火石（コーガ石）という世界的にも珍しい石で出来ており、その石の新島の埋蔵量は約 10 億トンと推定されているから無尽蔵に近い。彫刻刀で容易に加工できるので、イースター島のように素朴な大きな顔だけではなく、複雑で様々な像が存在する。

パンフレットを見るとモヤイという名称はイースター島のモアイからとっただけでなく島の言葉で「協力する、助け合う」とのことである。そういえば船用語で“もやい結び”というロープの結び方があるが、語源は同じかもしれない。



【民宿の門柱のモヤイ像】



【港の前のモヤイ像】



【港の駐車場のモヤイ像】

私たちは街を散策しながらレンタカー屋を探すが、街の中心に 1 軒しかないレンタカー屋は午後 1 時からの開店になっている。今はオフシーズンで観光客が少ないのは分かるが、それにしても午後 1 時からでは商売にならないだろう。でも、これが島の感覚かもしれない。

新島は歩いて回るには大きすぎるので、私たちは多少の雨は我慢してレンタサイクルを借りることにした。近くのレンタサイクル店ではおじさんが暇そうに店番をしている。この時期にしては珍しくお客が来たことに驚いたようだが、快く対応してくれる。おじさんは自転車で巡るコースや名所を親切に教えてくれて、さらに料金も通常よりも下げて貸し出してくれた。

私たちはおじさんから教えてもらったとおり街を走り抜けて、羽伏浦海岸展望台に着く。そこから見える羽伏浦海岸は 6.5km 続く白い浜で、サーフィンではハワイのノースショア同様の良質の波で世界的な名所だと看板に書かれている。そのためサーフィンの世界大会が開催されるので外国人も多く訪れ、街の雰囲気は異国情緒があって英語の看板も多い。

本日は風によって凄まじい波が打ち寄せており、サーフィンどころではない。



【羽伏浦海岸展望台から見た羽伏浦海岸】

## ■露天温泉

「湯の浜露天温泉」という温泉にやって来る。立派な更衣室があって足湯といくつかの露天風呂がある。これらの露天風呂は全て無料なのに誰も入っていない。この施設は新島村が作って運営しているものらしいが、この新島村のどこにそんな資金があるのかヨシさんが疑問に感じている。私とその疑問に「伊豆諸島は全て東京都ですよ」と言うと、彼はすぐに理解したようだ。

小高い丘の上には古代ギリシャの神殿を思わせる遺跡風建築物があり、何とも言えない光景になっている。その丘の上にも露天風呂があるが、オフシーズンということでその露天風呂には湯が張っていない。

私たちはその湯の無い露天風呂で昼食を食べることにして、ビールで乾杯してスーパーで買った弁当を美味しくいただく。吹き付ける風と雨が気にならないこともないが、露天風呂から見る景色は抜群だ。ここは新島の豪快な山と海の間であって無人島や港も見える。これに温泉の湯が張ってあれば言うことがない。



【ギリシャ遺跡風の露天風呂がある丘】



【ギリシャ遺跡風の露天風呂からの風景】

食事が終わり、せっかくの露天風呂なので入浴することにするが、ここで大きな問題が発覚する。水着着用が必須と書かれており、私たちは水着を持ってきていない。そこで誰もいないことをいいことにスッポンポンで入浴するという暴挙にでる。

実に気持ちが良い。お湯の温度はいくつかある露天風呂で異なり、自分に合った温度で浸ることができる。ギリシャ神殿のもとで海を見ながらの入浴は最高である。

そんな最高の気分で湯に浸かっていると、後から入ってきたおじさんに水着未着用を注意される。きつい言葉なので注意と言うより叱られるという表現の方が合っている。こちらが悪いことは百も承知なので、平謝りで湯から上がり露天温泉を後にする。

## ■流人の島

「十三神社」という立派な神社がある。山門があってどう見ても寺の造りをしているが、今は神社だ。おそらくは昔は神仏習合で神社兼寺だったのであろう。

近くには「流人の墓」がある。大島には源為朝が流され、新島も流人の島だった。新島に限らず、これから行く神津島も、先日私が行ってきた奄美群島も、昔はみな流人の島だった。島根の隠岐に至っては後醍醐天皇まで流された。かつてそれらの島は辺境の地で簡単に抜け出すことも出来ず、そこに暮らす島民と良しなに余生を送ることが多かったようだ。

新島への島流しは江戸時代から明治 4 年まで続いた。その間流された人数は 1333 人で、赦免されたのが約 500 人で、死刑になった人以外がこの狭い墓地で眠っているというから相当詰め込まれている。

流人の墓の隣に島民の共同墓地があり、流人の墓はその共同墓地よりも一段低くなっており、死んでも流人は上に上がれないようだ。

更生しない流人のための処刑場も残っている。



【流人の墓】

## ■島について思う

自転車旅を終わりにして、お洒落なカフェと雑貨屋を兼ねた店に入る。日本語と英語のメニューが併記されており、世界中からサーファーが訪れる島というのが理解できる。

ここでビールを飲みながら少し離れたところに貼ってある面白いポスターを見つける。日本各地にある島の形を切り取った絵が、佐渡島から大きい順に 100 島くらい並んでいる。島名が小さく書かれているが、近くに行かないと読めない。そのことをいいことに私とヨシさんとで島当てゲームが始まる。

最近の私の国内旅は島巡りが多いので、大きな島はほとんど行ったことがある。しかし 5 位だけは全く分からない。ヨシさんも知らない。ふたりでああこうだ言いながらいろいろな島の名前を出す、どれもしっくりこない。この大きさの島で私たちにも知らない島があるのだろうかという疑問に感じながら答え合わせのためにポスターに近づくと、5 位は天草下島だと書かれている。天草五橋で繋がっているので私には島の形のイメージが無かった。



【島の形のポスター】

ちなみに大きい順に佐渡島、奄美大島、対馬、淡路島、天草下島、屋久島、種子島、福江島、西表島、徳之島になっている。昨日まで泊まっていた伊豆諸島で一番大きい大島は 25 位だ。

島は本土との交流が非常に限定的なために時代の流れから取り残される傾向にある。それゆえ、島の生活は日本人の昔の生活が保存されているタイムカプセルという側面がある。

そんな日本人の昔の生活に触れることができることも、最近の私が島に多く行っている理由のひとつと言っていいだろう。さすがに現代に至ってはテレビやインターネット、交通機関の発達で本土と変わらないようになってきているが、それでも視線を変え、島民と話すとその島の暮らしや歴史が見えてくるから面白い。



## ■ 民宿の食卓

本日泊まる民宿「浜庄」は、浜庄丸という船を持っている船宿なので食事を期待して予約した。そしてその期待どおりに夕食のテーブルには豪華な料理が並んでいる。

ヒゲダイの煮付けと塩焼き、イシダイの刺身、伊勢エビの味噌汁などが並ぶ。その味はもちろん美味い、それも抜群に美味い。刺身にしても塩焼きにしても鮮度がいいから美味しいのだろう。

私が島の旅を好む理由に料理を挙げることも多いが、島の食料事情は島外から持って来るものは高いが、島内で獲れるものや栽培しているものは安くて鮮度が良い。小さな島ほどその傾向が顕著になる。それは考えれば分かることだが、考えるのと実際に体験するのでは雲泥の差で、大島よりも小さな新島に来てそれを実感する。



【民宿浜庄の夕食】

私たちの隣には若い男の2人連れがいる。声を掛けると、ひとりがこの島に3年前から住んでおり、もうひとりは本日私たちと同じ船に乗って彼のところに遊びに来た本土の友人だという。

その話を聞いて私はピンときた、この人たちの職業はおそらく教師なのだろうと。ふたりは本土の学校に勤めていた元同僚で3年前にひとりがこの島に赴任して、そこに友人の彼が訪ねてきたと私は推理した。彼らの話ぶりや内容からもそれは十分に在り得る。

私たちは地元の彼から島の情報を、特に明日渡る予定の式根島について詳しく聞き始める。

そして私は昔から思っていたある疑問をこの島で教師をしていると私が勝手に決めつけている地元の彼に聞いてみることにした。

その疑問とは、伊豆諸島は“伊豆七島”と言うが、実際には有人島は9島あって7島ではない。単純に“世界の七不思議”や“七つの海”というように7という数字の持つ特別な魅力かと当初は思っていたが、そう簡単に結論づけることに疑問を感じていた。私はその答えを今回の旅で見つけないかと思ってやって来た。

私はその質問を彼にぶつけると、彼は「新島と式根島は一体で、同じ新島村なので、この2島をひとつに数えているようですね。あとの1つはよくわかりませんが、青ヶ島は八丈島の遙か南にあって絶海の孤島なので七島に入れてもらえなかったのかもしれないですね」と教えてくれる。

私はこの時初めて式根島と新島が同じ村であることを知る。そのためにこの2島間だけを結ぶ連絡船が存在するというのも理解できる。それにしてもそんなことも知らないで島に来て、そんな質問をするのだから、恥ずかしさの上もない。

これで数字上は辻褄が合う。青ヶ島の件は、私も薄々そんなことかもしれないと思っていたが、青ヶ島のことは実際に青ヶ島に行って聞いた方がいいだろうと思い、ここではこれ以上の深追いをやめた。

#### ■神津島へ

朝食を食べていると東海汽船からの放送があり、本日の上り便は欠航するとのことだ。私たちが乗る下り便は新島から式根島、神津島へ行くので問題ないが、その船が神津島から戻る上り便は式根島、新島、利島には寄港しないという。午後に海がさらに荒れるからというのが理由だ。

私たちも予定変更だ。式根島での下船をやめて、比較的港が大きい神津島に行くことにする。終着港なので今回のように寄港しないということはないだろうと、この時はそう思っていた。

朝、港まで女将に車で送ってもらう。車の中で私は女将に「他の島にはよく行くのですか？」と質問すると「4島競技会の時に行くよ」と返ってくる。私は「4島競技会？島同士の対抗戦ですか、それは燃えますよね？」と聞き返すと、女将は「島民全員、燃えるよ」と即答だ。

ちなみに4島とは利島、新島、式根島、神津島のことで、伊豆諸島の中でも大島は別格のようだ。これから行く3島も新島のような雰囲気なのだろうと、私はある種の期待を持ち始める。

船は新島を出航し、かろうじて式根島に接岸するが棧橋は風が吹き荒れて高い白波が押し寄せている。これは明日が心配だ。



【式根島の棧橋】

## 第三章 神津島

### ■村営バス

神津島に着き、朝予約した「山下旅館本館」の車が迎えに来ている。私たちは宿に荷物を置いて村営バスに乗る。

この島には公共交通機関として村営バスが走っており、誰でも1回200円で乗ることができる。バスといってもワゴン車なので運転手との距離は近い。そして乗客は私たち2人だけということもあり、運転手に観光情報や、島の裏話など聞くことになる。

バスは私たちの着いた港の反対側にある多幸湾に着く。

運転手は「ここが多幸湾、背後の山が天上山、あの栈橋の半ばくらいから見ると綺麗だよ。湧き水も出ているから飲んでくるといい。」と教えてくれる。

言われたとおりに行ってみると、多幸湾の青い海から背後の天上山を臨む景色は抜群に素晴らしい。背後の天上山の山肌が白くむき出しになっていて、山肌の岩や砂が海に崩れ落ちている。その海が青い、それも水色の絵の具を溶いたようなという表現が似合うような特徴的な青さで、山の岩や砂にそのような水色になる成分が含まれていると思ってしまうほどだ。

写真を何枚か撮り、しばらく絶景に酔いしれる。



【多幸湾と背後の天上山】

私はこんな素晴らしい景色を予想しておらず、これは完全に「偶然と感動」だ。

私がかねてより感動について説いてきた。それは予期せぬこと期待していなかったことが実際に行ってみて体験して素晴らしかった時ほど感動が非常に大きくなるというもので、逆に期待し過ぎると落胆することもある。それ「偶然と感動、期待と落胆」というもので、過去の私の旅行記にはその旨を時々書いてきた。

今、私の目の前に広がっている多幸湾と天上山の絶景はまさしく予期せぬもので、私は相当に感動しており、涙さえ出そうな状態だ。

運転手が言っていた湧き水が出ている所に行ってみる。今度は水の豊富さに驚く。「こんな小さな島なのに、この水量は！」と私は思わず叫ぶと、ヨシさんも同感らしいが、既にゴクゴクと湧き水を飲んでる。感動を口にする前に湧き水を口にするあたりが彼の行動力だ。

人間は感動すると、言葉よりもまず体が動くということか。

バスに戻った私たちに運転手は「昔、あの栈橋は無かったので、もっと絶景だったよ」と言っている。確かにあの栈橋がなければ人工物がない自然だけの造形美になる。ただ栈橋がないとあのアングルからの写真は撮れない。



【多幸湾の栈橋】

それにしてもバスの運転手は島のことなら何でも知っている。食事や遊び処など穴場情報はもちろん、観光名所は歴史や背景も加えて実に詳しい。観光行政や島の将来のことも裏事情を含めて詳しく教えてくれる。例えば観光客をいくら呼んでも島の宿泊施設が圧倒的に不足していることや島で獲れる魚が激減していること、その対策なども熱心に話をしてくれる。それは島のことを毎日真剣に考えていないと出てくるものではないだろう。

私はバスの運転手だけではもったいないと彼に伝えると、彼の本業はジャンボ観光タクシーの運転手で、今はコロナで観光客が激減して村営バスの運行を頼まれたという。ただし人を運んで感動や思い出作りを生業にしたいので現状は辛い状況だとも言っている。彼は自分のやりたいことを“思い出産業”と言っているから驚きだ。

観光需要もそろそろ回復してきており、大手旅行社からは彼を指名しての予約もボツボツ入ってきていると嬉しそうに話している彼の笑顔がとても印象的だ。

そんな彼と話をしていると、“自分がやりたいこと”と“自分ができること”を見極めて両立させている人にここ神津島でも会えたような気になる。島で生きるということは都会以上に自分と向き合いことが重要なのだろう。

私たちは次も村営バスに乗って島の北端にある「赤崎遊歩道」に行く。赤崎は海岸沿いに大きな岩が連なっており、そこに立派な木道が長い距離延びている。途中で小さな島に渡る橋が架かっており、その橋の両側から海に飛び込む飛び込み台もある。子供たちがその飛び込み台から青い海に飛び込んでいる写真がこの島のポスターに使われており、ここがそのポイントになる。それにしてもこの木道には相当に金をかけたに違いない。



【赤崎遊歩道 飛び込み台】

赤崎の帰りに「温泉保養センター」に立ち寄る。ここには混浴で水着着用の100人は入れるという露天風呂があるが、残念ながら湯が張っていない。それでもいくつかの露天風呂、海を眺めながら浸かる足湯、水着不要の男女別の温泉棟もある。

私たちは水着を持ってきていない。再びスッポンポンで入るという暴挙にでることはせず、おとなしく温泉棟に行く。温泉棟には大きな湯船が3つ、そしてサウナも水風呂もある。湧出温度は57℃、泉質はナトリウム塩化物強塩泉ということでかなり塩分が強い。おそらく海の直ぐ近くなので海水がかなり入っているのだろう。



【100人入れる露天風呂 湯は張っていない】



【大きな岩の上の露天風呂と手前の露天風呂】

## ■山下旅館本館

村営バスの旅を終えて、今宵の宿「山下旅館本館」に戻ってくる。この宿は創業 115 年の神津島で最も歴史のある老舗旅館で街の中心部と前浜海岸にも近く、立地は良い。収容人数最大 30 人というから規模的には小さい。

そして夕方 5 時、東海汽船の放送が聞こえてくる。明日は全面欠航すると言っている。私はどうとうその時が来たかという気持ちになる。

連泊となると同じ宿は面白くないので宿を変える決意をする。

幸いにして「山本旅館別館」というのがあって、ここ山下旅館本館の姉妹館で同じ経営者だという。しかも島内では珍しい温泉付きの宿だというので、本館の女将に明日の別館への予約をお願いする。

実はこの 2 つの宿については村営バスの運転手からの事前情報があった。本館は年老いた女将が 1 人で切り盛りしているので、夕食の料理は別館から運ばれているという。だから同じ料理人が作っている。どちらもこの島で一番の料理だとも言っていた。

夕食にはその島一番の料理が並んでいる。これは豪華だ。金目鯛の煮付け、カサゴの唐揚げ、サザエのつぼ焼き、カツオと地魚の刺身、島海苔が入った茶碗蒸し、味噌汁にも島海苔とキノコが入っている。

もちろん味は抜群で、これならば明日の山下旅館別館の料理も期待できそうだ。



【山下旅館本館の夕食】

## ■神津島 2 日目

朝早く「山下旅館別館」に宿を変える。別館はまだ新しく規模も比較的大きくお洒落なロビーもある。港近くにある東京電力の発電所の隣にあり、港が一望できる。ただし港は防波堤増強の工事が行われており、クレーンや工事用車両があって離島の素朴な雰囲気はしない。

荷物を置き、本日もバス停に行く。そしてバスを待つ間にあまりの強風で私の帽子が飛ばされる。慌てて拾おうと追いかけると、慌てたのが災いして転び、反射的にコンクリートに手を強く着いたので手のひらにケガをして、出血があって血が止まらない。

その様子を見ていたヨシさんがやってきて、キズバンを差し出してくれる。何と用意のいいことだろうと感謝感激だ。

それにしても帽子はかなり強く深くかぶっていたが、それでも飛ばされるとは恐るべき強風だ。

バスに乗ると昨日と同じ運転手で、本日もまたいろいろな情報ももらう。

運転手のアドバイスでは天候が回復すれば天上山に登ることを勧められたが、この風では山登りは危険だ。何しろあれだけ深くかぶっていた帽子が飛ばされるほどで、それゆえ本日は松山遊歩道を歩いて「長ツ崎展望地」と「ぶざえも展望地」を見て島の中心地まで歩くことにする。

2つの展望地からの眺めは悪くはないが曇り空なので海の青が映えない。それにしても風は相変わらず強い。

島の中心地を見下ろす高台には村営施設が集まっている。グラウンドがあって神津島を代表する古民家が移築展示されている。古民家は立派な造りで1900年（明治33年）建築の集落最古の民家だという。囲炉裏の部屋をリビングとして数えると今風の言い方では4LDKになる。

その隣にはお洒落で立派な建物があって、最初は何の建物か分からなかったが神津島図書館と書かれている。人口1900人の村にしてはと言うと大変申し訳ないが、立派で似つかわしくない。私もヨシさんも「これが村の図書館とは驚きだね」と口をそろえて言う。そしてヨシさんは「さすが東京都だ」とも付け加えた。



【移築展示されている古民家】



【村営図書館】

中心地に来るとスーパーマーケット、立派な都立神津高校、100円ショップもある。

手のケガ用にキズバンを購入するために100円ショップに入る。私は「この島で百円ショップはここだけ？」と店員に聞くと、店員は「そうですよ」と答える。私は「儲かってしょうがないでしょう」と聞くと、店員はこぶしを握り親指を立ててニッコリ笑っている。

しかしながら島は島内のものは基本自給自足なので安く手に入るが、島外のものには結構な輸送費がかかる。それなのに本土と同じ100円で売っており、半分くらい慈善事業のような気がする。

港には「よっちゃーれセンター」という建物があり、1階は海産物を売っていて2階にバスの運転手お勧めの食堂がある。この食堂は漁協の婦人部がやっていると言っていたが、漁協だけあって新鮮な料理が期待できそうだ。

メニューだけ見て帰ろうとしたが1000円の刺身定食に目が留まる。食堂のおばさんに2人でシェアして食べると言っていて、刺身定食1人分とビールを注文する。するとお吸い物と野菜のかき揚げがもう1人分サービスで出してくれる。実にありがたい、さすが漁協の婦人部だ。

宿に戻って宿の温泉に浸かっていると東海汽船の放送がある。明日も欠航だという。

もはやもう1泊も別の宿にする根性もないので、夕食時にもう1泊お願いする。シート交換や掃除はいらぬから安くしてくれと交渉をする。これは一方的なお願いではなく、当方もお金を払うので一応は交渉になっている。そして交渉が成立して少し安くしてもらう。

それにしても本日の夕食も豪華だ。煮魚、焼き魚、刺身、帆立の串焼き、明日葉や海老の天ぷらなど並んでいる。昨日の本館の料理もここで作っていたので同じようなレベルだが、本日の魚の大きさにヨシさんは驚いている。



【山下旅館別館の夕食】

## ■山登り

神津島に来て3日目、朝起きて海を見ると昨日とはずいぶん異なり、波は高くない。これならば船は接岸できそうな気もするが、既に欠航は決定している。

天気も回復し、本日は神津島の主峰、標高572mの「天上山」に登ることにする。天上山はカルデラ状の山で、外輪山とカルデラのくぼ地部分を含めて大きな台形状の頂上を形成しており、かなり珍しい山になっている。マッターホルンにも登った山男のヨシさんがそう言うのだから間違いない。

山に登ることになったので、ヨシさんは朝食のご飯と味付け海苔で簡単なおにぎりを握っている。彼の準備万端の行動にはいつもながら頭が下がる。



バス乗り場に行くと若い女性がいる。話をすると彼女も3日間この島で足止めされ、本日は天上山に登るといふ。若い女性なのでおじさんたち2人が色々聞くと、それまで彼女は式根島でアルバイトをしていたという。アルバイトしながら島巡りの旅をしているから驚きだ。彼女から式根島のいろいろ穴場情報を教えてもらいながら、私たちと一緒に天上山に登ることになる。

9時40分に黒島登山口にバスが到着し登り始め、登り始めて約1時間で外輪山の黒島頂上に出る。標高480mから山の上から海まで一気に見ることができる。さすがに風が強い。



【黒島頂上から村の中心部から前浜を臨む】

ここからはカルデラのくぼ地巡りになる。少し歩くと先代池、そして裏砂漠がある。確か大島にも裏砂漠があったが、大島とは雰囲気異なりどこか別の惑星に来たような殺伐とした感じが印象的だ。



【裏砂漠】

不動池というハート型の池がある。山の上なのに水が溜まっているのが驚きで、池の周りに緑も多いからいつも水があるのだろう。ハート型のくぼみ部分に鳥居があって社もあるので昔からこの島の守り神を祀っているのだろう。

不動池を上から見るができるビューポイントがありそこからの眺めは最高だ。緑に囲まれたハート型の池、その向うに低い外輪山、そして海の向こうに式根島と新島が浮かんでいる。

それにしてもこのハート型はあまりにも整い過ぎているので、ヨシさんが「島民がハート型に造り変えたのかも」と彼女に話している。そんなヨシさんの言葉もお構いなくハート型の池はインスタ映えするので彼女は写真を撮りまくっている。写真を撮り終えて彼女は「島民ではなくて神様ですよ」と答える。やはり乙女の夢を奪ってはいけなかい。



【ハート池 その向うに式根島と新島が見える】

最後の難所の標高 572m 最高地点に登る。吹きさらしなので風が強く、またもや帽子が飛ばされそうになる。同じ過ちを繰り返すわけには行かないので、私は帽子をかぶらずに手に持って登る。

頂上に立って、私は手に持った帽子を指して「これが再発帽子（防止）だよ」と言う。ヨシさんはグーを出して親指を立ててくれる。



【標高 572m の天上山最高標高地点】

再発防止という言葉は世の中でよく使われるが、同じトラブルが二度と発生しないように策を講じることである。気を付けるとかもっと深くかぶるという精神論的なものは再発防止とは言えず、絶対に飛ばされない仕組みにすることが重要だ。そして私は帽子をかぶらないという選択をした。できればその帽子をバッグに入れてしまう方が良いかもしれない。

最高地点を降りて、ここで黒島登山口に下山し多幸湾に行きたいという彼女と別れる。

私たちは白島登山口に向かい、風を避けるために少し下った所で缶ビールを開け乾杯し、今朝ヨシさんが作ってくれたおにぎりを食べて昼食にする。

下山をして白島登山口に着いたのが13時、全行程3時間強、良い運動になった。

砂漠、池、緑、岩石などがあって、海や他の島も見えて本土の山とは景色が全く違う。山登り経験がそんなに多くない私にしても天上山は実に面白い。ヨシさんも「この山は山好きにはたまらないね」と言っている。

#### ■金目鯛定食

再び漁協婦人部の食堂にやって来る。先ほど昼食を食べたにも関わらずバスの運転手お勧めの金目鯛定食を食べる。大きな金目鯛の煮付けにかき揚げなどの小鉢がいくつか付いて1000円というから信じられない。

値段を書かずに写真をLINEで旅友たちに送ると、戻ってきたコメントは「島だから安いでしょう、2000円？」という返信だった。



【よっちゃーれセンター2階の食堂の金目鯛定食】

#### ■神津島の水配り伝説

神津島の中心地の前浜には「水配り伝説の像」がある。高い塔の上に立っているひとりの人物が水を配って、それを何人かの人物が下から眺めているようなオブジェで、この像は伊豆諸島にまつわる伝説から出来たものだ。

その伝説とは、伊豆諸島の誕生から始まる。

出雲の国から神々が伊豆にやってきて最初に熱海沖に初島を創り、そして神々が集まり相談する島として神津島を創り、神津島を拠点に南北に島を次々に創った。いわば神津島は伊豆諸島の中心、神々が集まる島、それゆえ神津島はかつて“神集島”と記されていた。

それが「水配りの像」の伝説には以下のように繋がる。

神津島の天上山に、島々の神々が集まり会議をした。一番大切な議題は命の源である「水」をどのように分配するかで、そこで次の朝、先着順に分けることになった。朝になり一番早く着いたのは御蔵島の神で、御蔵島は最も多く水の配分を受けた。次は新島、三番目は八丈島、四番目は三宅島、五番目は大島だった。こうして水は次々と配られ、最後に寝坊した利島の神がやってきた時には水はほとんど残っていなかった。利島の神は怒り、わずかに残った水に飛び込んで暴れまわった。その水が四方八方に飛び散り、神津島ではいたるところで水が湧き出るようになったと言われている。

この伝説は神津島で湧き水が多いことを強調しているが、私にとっては伊豆七島問題の解明に向けて実に興味深い。

神津島が伊豆諸島の真ん中に位置して、その南北 3 島ずつの島の神が登場する。北は大島、利島、新島、南は三宅島、御蔵島、八丈島、そして神津島を加えて 7 島の神が登場するが、神が登場しなかった島は式根島と青ヶ島ということになる。やはりこの 2 島が外されている。

この像を見ていて何故か私は源為朝を思い起こしてしまう。為朝は身長 2m を超える大男で乱暴者と言われているが、源氏なので、元々は天皇家で権威は充分にある。伊豆諸島を支配していたので各島に部下を配置し、その部下たちに恩賞を与えることは当然の話だ。その光景を想像してしまう。



【水配り伝説の像】

水配り伝説には出てこないが、静岡県熱海市の初島も本来は伊豆諸島と呼んでもいいのかもしれない。現在は伊豆諸島全てが東京都に組み込まれているが、実は 1878 年（明治 11 年）まではそれらは全て静岡県だった。もしもそのまま静岡県だったら初島を含めて伊豆八島になっていたのかもしれない。八は末広がり縁起がいい。

## ■星の島

足止めをくっている 3 日間で、郷土資料館や観光協会などを訪れていると、この島は星がきれいなので「星空保護区」に指定されていることを知る。

星空保護区とは光害の影響のない、暗く美しい夜空を保護・保存するための優れた取り組みを称える国際認定制度で、2001 年に国際ダークスカイ協会が活動を始め、現在では世界に 150 ヶ所の保護区がある。ニュージーランドのテカポやナミビア共和国のナミブ砂漠、アイルランドのアイベラ半島などは、星空の美しさで日本人観光客にも人気がある。日本では 2018 年に西表石垣国立公園、続いて 2020 年に神津島が認定された。

神津島ではその申請に向けて準備を進めてきて、夜空に光がもれない光害対策型の街灯・防犯灯に取り替えてきたという。

星空保護区は単に星がきれいに見える場所ではなく、光害から夜を守ることを目的としているため、光害対策をして暗さが基準値に達しているか、光害に関する教育プログラムやイベントを行っているかなども認定の条件になっている。夜の暗闇を守ることは野生動物の保護やエネルギー節減といった環境面の他に、人間本来の生活リズムを取り戻すことに繋がる。

そんなようなことが展示資料には書かれている。残念ながら今回の旅では天候の問題で星空を見ることはできなかった。いつかその星空を見に来たいと思って神津島を後にする。

## 第四章 式根島

### ■式根島に渡る

目が覚めて、宿から見る海は荒れていない。そして3日間足止めをくらった神津島を離れて、本日ようやく式根島に渡ることができる。

式根島の民宿「清水屋」に到着する。この宿は新島で夕食を共にした地元の彼に教えてもらった宿で、船の出航が確定した今朝予約した。

民宿で電動アシスト自転車を借りる。私は電動アシスト自転車に初めて乗るが、これが実に優れものであることに驚く。式根島は遠くから見た姿は平らな島だが、上陸するとアップダウンが多く、電動アシスト自転車は実に頼りになる。

島の西にある「神引（かんびき）展望台」にやって来る。この展望台からの眺望は実に素晴らしい。すぐ近くにある新島はもちろんのこと、その左の方には三角錐が海面に突き出たようなあの利島までも見える。

この景色を見ながら昼食をとることになるが、その前にビールで乾杯だ。

そのつまみとして面白いものを買ってきた。それは式根島でアルバイトをしていた彼女から聞いたスーパー「みやとら」で買った彼女イチ押しの「たたき丸」というもので、見た目は揚げた肉団子、丸いさつま揚げという感じだ。

彼女の説明を思い出すと、たたき丸は具を入れてにぎったご飯の周りに「たたき」をつけて揚げたものだという。たたきとは式根島の郷土料理で魚のすり身を調味料で味付けしたもので、ここからたたき丸という名前が付いたとも言っていた。

具は明日葉の佃煮やハムチーズなどあるらしいが、私たちが買ってきたのはクサヤを小さく切ったもので、実に独特な良い味を出している。ビールのつまみにはもってこいで、クサヤ特有のあの匂いは多少するが、味の方が遥かに勝っているので気にならない。これが1個200円とは、実にありがたい。



【神引展望台よりの眺め 右奥が新島、左奥が利島】



【クサヤのたたき丸】

## ■式根島は温泉天国

海岸にある「地鉦（じなた）温泉」に行く。ここは超が付くほどのワイルドな温泉で、彼女の話では、満潮時は入れるが干潮時には入れないと言っていた。

本日の満潮は 11 時頃、干潮は 16 時頃で、今は 14 時で既に潮位は干潮に近い。大丈夫かと思いつつ崖下にある温泉に降りていく。岩場の海岸にいくつもの池のような入り江があり、温泉の湯船になっている。底からかなり熱い湯が湧き出ており、潮位がある程度高いと海水が入り込んで入浴できる温度になり、適当な場所を選んで入るといふ温泉だ。

今は干潮に近づいているので適温を見つけるのに苦労するが、何とか入浴することができた。それでも波によってその温度のバランスが崩れるので常に適温で入ることは容易ではない。

私たちは四苦八苦しながらも 10 分間くらい入浴を楽しむことができた。これは私の温泉人生においてもかなり貴重な体験になるのは確実だろう。

付け加えておくと、この温泉も水着着用と書かれている。今回の旅では私もヨシさんも水着を持ってきていないので、水着に見えるかもしれないジャージをまくり上げての入浴になった。しかし苦労の甲斐もなく入浴客は私たちだけ、超ワイルド温泉は完全に貸し切りだった。



【地鉦温泉】



【地鉦温泉 左がヨシさん 右が私】



【地鉦温泉 湧き出ている源泉のひとつ】

地鉦温泉の近くにある「足付(あしつき)温泉」と直ぐ隣の「山海温泉」に行く。

しかしこれらの温泉は干潮でないと入れないような温泉で、今は海水が多くて冷たくて入れない。

それにしてもここもワイルドな温泉は、夏の観光シーズンには観光客、それも若者たちでいっぱいになるのだろう。



【足付温泉】

「松が下雅湯(まつがしたみやびゆ)」はあの熱い地鉦温泉からお湯を引いて温度管理をしている温泉で、漁港の近くで民家も多くロケーションも含めて非常に良いところにある。

今は平日の昼下がり、時間も時間なので入浴している人たちは漁師のような人が多いように感じられる。人口約 500 人のこの島ではみな顔馴染みなので和気あいあいと話をしている。仕事の後にこんなに良い温泉に毎日浸かって、仲間たちと話をし、新鮮で美味しい魚を毎日食べていれば、こんな幸せな生活はないだろう。



【松が下雅湯のいくつかある露天風呂 向こうに漁港が見える】

#### ■ 民宿清水屋

今晚泊まる民宿「清水屋」は綺麗で粋な造りをしている宿だ。特に宿のロビーに相当する処には囲炉裏があって、その上の天井部分は梁がむき出しになっており、実にセンスが良い。

受付をしてくれたこの宿の女将の娘だという若い女の子と話をすることができたので、宿の造りが上品だとか、センスが良いとか褒めていると、彼女は宮大工をしている叔父がリホームしてくれたと言っている。それゆえ何となくこの宿の雰囲気“雅”な感じがするのも納得する。

夕食は刺身や煮魚を中心に豪華な料理が並んでいるが、私たちは何日もそんな料理を食べているので、もはや感覚が麻痺して驚かない。

驚いたのは食事の後で、食事を終えて部屋に戻ろうとするとロビーにある宮大工が造ったという囲炉裏に火が入っており、その囲炉裏端で酒盛りをしている人たちが3人いる。

南の島とはいえ12月なので少し寒く、私は囲炉裏のところで立ち止まり「暖かそうですね」と話しかける。すると3人の中で恰幅が良い、人の良さそうなおじさんが「一杯飲みますか?」と言ってくれる。この誘いに私は「囲炉裏の火が暖かそうで、お言葉に甘えて、一杯だけ」と言って囲炉裏端に腰を降ろした。いつものことだが、「一杯だけ」で終わるはずもない。

酒を酌み交わしながら段々分かってきたことは、私たちを誘ってくれた恰幅の良いおじさんが、囲炉裏を作った宮大工の叔父さんで“親方”と呼ばれている。その親方に仕事で呼ばれて本日の船で島にやって来た職人2人を加えて3人で酒盛りを始めていた。私たちが加わった時はまだ囲炉裏の火も入ったばかりだったが、囲炉裏の火も酒宴も徐々にヒートアップしていく。

さらに2人加わり、本日の宿泊客全員参加になる。後から加わった2人はまだ若く、海洋資源の写真を撮るために仕事で来島しているプロのカメラマンとクリエイターだという。このコンビで日本各地の島を仕事で巡っているというから恐れ入ってしまう。彼らもまた趣味と実益を兼ねた仕事なのだろう。「全くとって羨ましい」と私が彼らに言うと、「旅の研究の方が羨ましいですよ」と返って来る。

そんなメンバーも加わり、親方と工事職人を中心にした酒宴は楽しく盛り上がる。それにしてもこの3人のチームワークは抜群で漫才でも聞いているような気分になってくる。こんなに楽しい仲間たちと仕事をするために今回は式根島に来ているが、日本各地、時には台湾やモンゴルといった海外までも仕事で呼ばれるというから、これもまた羨ましい。

この人たちも“自分ができること”と“自分がやりたいこと”が一致している。さらに大島のミゼットの彼のように“他人ができないこと”も加わっているから羨ましいと感じるのだろう。もっと付け加えろとこの人たちには“仲間と一緒に”というのも備わっている。だから仕事の話も実に面白い。私は久しぶりに美味しい酒を飲ませてもらった。



【囲炉裏端宴会のシーン】



何が語られたか、その詳細はいつものようにあまり覚えていないが、私は例の伊豆七島問題を親方に聞いたことは覚えており、その答えは実に驚くべき内容だった。

親方は「式根島は江戸時代の大地震と津波によって新島から分離されたので昔は同じ島だったよ」と自信満々に話してくれた。島の伝承ということだが、それは私にとってもこの囲炉裏端宴会に参加している人たちにとっても全くの初耳のようで皆驚いている。しかし親方の人間性や存在感によってそれを疑う人はいない。

“式根島分離説”が囲炉裏端宴会に加わり一層の盛り上がりになった。話題も酒も尽きることなく、囲炉裏で焼いてくれた魚も実に美味かった。私にとって久しぶりに旅先で感激する宴会になった。これも「偶然と感動」というものだろう。

## ■最終日

翌日、民宿の車で港まで送ってもらい、出航まで時間があつたので港の近くの「泊海水浴場」まで歩いて行く。

泊海水浴場は式根島の観光ポスターに必ず出てくる場所で、扇状の入り江で美しい砂浜の海岸になっている。もう少し正確に表現すると、扇を要の部分を外海にして広げた形になっており、要に向かって両岸から陸地が延びており、要の部分だけ外海と繋がっている。扇で風を作り出す面、つまり扇面と呼ばれる部分が海水浴をする砂浜で遠浅になっている。理想的な海水浴場で要の部分から外海に出なければ安全に遊ぶことができる。そして遊ぶための設備もあって、それは飛び込みに使われるような岩が真ん中にある。

海岸に降りて行くと、その飛び込みの岩が存在する理由が分かる。実はその岩は昔あつた栈橋の一部で、かつては陸から延びた栈橋があつてその岩が突端部分になっていた。現在も途中で栈橋が残っており、その岩と残った栈橋の間の部分だけが欠落している。その残った栈橋の形状が「なまこ」に似ているので史跡「なまこ栈橋」と名前が付いている。

ここに栈橋があつたということは、昔は港だつたことを意味している。確かにこの扇状の入り江は天然の良港にもなるので当然かもしれない。近くにはその栈橋についての説明看板が立っている。そこには「泊海水浴場は以前漁港として使用されていた。明治時代に新島から人が移住する前に船の中継地や荒天候時の一時避難に使われていた。」と書かれている。

明治時代に人が移住、つまりそれまでは無人島だつたことを意味している。これによって親方が言っていた江戸時代の地震と津波による式根島分離説が現実味を帯びてくる。



【泊海水浴場】



【なまこ栈橋】

実は本日は利島に行くつもりだった。朝起きてすぐに船の運航状況を確認して利島の民宿に電話したが、満室とのことで断られた。他の宿にも電話するがどこも満室だ。何日間か船が欠航したので利島で仕事のために泊まる人が多いらしい。

これは「神のお告げかもしれないね」と私はヨシさんに言葉をかけて、利島行きを断念することを決めた。それはまた神津島で3泊したのも神のお告げで、おかげで神津島の魅力をたっぷり体験することができた。もしも1泊だったら神々が会議をした天上山に登ることもなかっただろう。

私たちは神のお告げに従い、利島は別の機会に訪れようと伊豆諸島の旅を終わりにした。

## 第五章 旅を終えて

### ■式根島分離説と伊豆七島問題

親方が言っていた江戸時代に式根島が新島から地震の津波で分離した説があまりに衝撃的だったので旅を終えて調べてみた。

この説は、式根島は江戸時代の1703年の元禄大地震の大津波によって新島から分離されたというもので、真偽の程はともかくもそのような説があるのは事実だ。しかし、その説を裏付ける古文書などは見つかっていない。逆に1702年に作成された地図では新島と式根島は分かれて描かれているから、どうもおかしい。

新島村が1996年に編さんした「新島村史 通史編」にそのことの記載がある。

新島と式根島が陸続きだったとする文書が明治10年になって突然現れた。それは明治5年に企業家が式根島の払い下げを国に願い出て、これを知った新島の島民が危機感を持った。当時の式根島は新島の島民にとっては庫島であって塩の精製場や漁場として利用していた。これを奪われるのを危惧して式根島への移住も検討された。本土の者に横取りされることを危惧した新島の島民がかつては陸続きだったので新島の一部だと主張する裏付けにしたらしい。

そして式根島は1888年（明治21年）から定住が行われた。

新島と式根島は直線距離で2.5km離れており、地震や津波で離れたとするにはやはり無理がある。それでもこの話は衝撃的で受けがいいので、観光ガイドや島民が方々で語られているという。

もうひとつ仲間外れになっている青ヶ島についても調べてみた。

青ヶ島村のホームページによると、青ヶ島がはじめて歴史に登場するのは15世紀に入ってからだが、その内容は船の遭難などの海難事故の記録ばかりで、人が住んでいたとは書いていない。1785年の天明の大噴火で島民200人全員が70km離れた八丈島へ逃れ、青ヶ島は無人島と化した。再び島民が戻ったのは50年後という記録が残っている。

以上のような事実を並べていくと、人が住んでいたという条件から水配り伝説や伊豆七島と呼ばれ始めた時期が見えて来る。

その時期は 17 世紀の江戸時代初期かそれ以前になる。私の推理では 12 世紀、鎌倉時代の少し前の源為朝が生きた時代まで遡る。為朝が支配していた島はもちろん人が住んでいたからだ。

為朝にしてもいきなり 7 島ではなく、徐々に勢力を拡大させて 7 島になったのだろう。“七つの海”を制するなどの言葉から男の生き様を象徴するのに“伊豆七島”は響きが良い。

為朝の支配という観点から考えると、初島を入れて伊豆八島にならなかったことも理解できる。神奈川県湯河原町付近から南の海を見ると、まず初島、そして大島や利島が見える。普通に考えると初島を入れて伊豆八島になるのが当たり前だ。しかし初島は伊豆半島の豪族たちの勢力範囲で、為朝も手を出せなかったのだろう。

全体的にかなり大胆な説になったが、もちろん今後も検討する必要がある。特に青ヶ島は実際に行ってみないと分からない。

#### ■宿の評価（温泉評価委員会）

今回泊まった宿は 1 軒だけ温泉宿だが、それ以外は温泉宿ではない。それでも温泉以外の項目の評価を残すためにいつものように温泉評価委員会を開催し評価した。

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合っって各項目を 5 段階で評価し、委員会として評価値を算出する。

評価の基準は、5 は驚き感動、4 は普通に良い、3 は可もなく不可もない、2 は普通に悪い、そして 1 は失望落胆としている。

ペンション「すばる」は泉質-、風呂-、料理 4.5、コスパ-、サービス 5、建物・部屋 4、立地環境 5、総合点 4.63 になった。

民宿「浜庄」は泉質-、風呂-、料理 4.5、コスパ 5.0、サービス 3.5、建物・部屋 3、立地環境 4、総合点 4.00 になった。

「山下旅館本館」は泉質-、風呂-、料理 4.5、コスパ 4、サービス 3.5、建物・部屋 3.5、立地環境 4、総合点 3.90 になった。

「山下旅館別館」は泉質 4、風呂 3、料理 4.5、コスパ 3.5、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 3.5、総合点 3.79 になった。風呂の評価が 3 なのでこのような総合点になったが、他の宿ように泉質と風呂を未評価にすると総合点 3.90 になる。

民宿「清水屋」は泉質-、風呂-、料理 4、コスパ 4、サービス 5、建物・部屋 4.5、立地環境 4、総合点 4.30 になった。囲炉裏宴会をサービスとして評価したので高くなっている。

#### ■旅の記録

実施は 2021 年 12 月 4 日（土）～11 日（土）の 7 泊 8 日、その行程を以下に示す。

・1 日目 久里浜発 9 時 40 分のジェット船に乗り 10 時 40 分伊豆大島岡田港着

「ペンションすばる」で作業

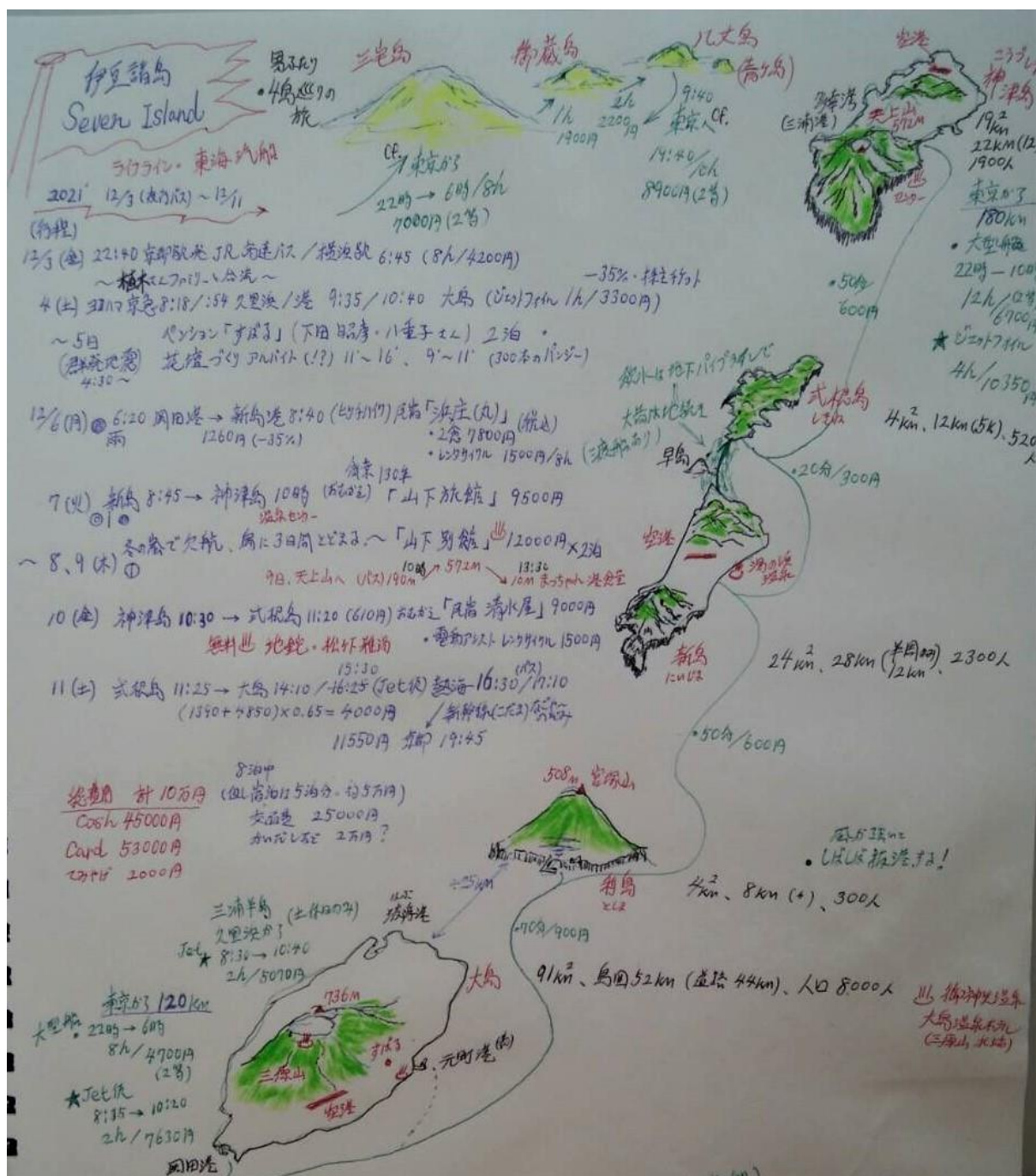
- ・ 2 日目 午前中は作業、午後に 3 人を港まで送り、泉津の切通し訪問
- ・ 3 日目 6 時 20 分伊豆大島発の大型船で新島に向かい、8 時 35 分新島着、  
民宿「浜庄」チェックイン、レンタサイクルで島内散策、羽伏浦海岸展望台、  
湯の浜露天温泉で昼食、十三神社、流人の墓、カフェでビールを飲む
- ・ 4 日目 8 時 45 分新島発の大型船で神津島に向かい、10 時 00 分神津島着、  
「山下旅館本館」チェックイン、神津島港から村営バスで多幸湾、そこで軽い昼食、  
神津島港に戻り郷土資料館、水配りの像、村営バスで赤埼、温泉保養センターを訪問
- ・ 5 日目 宿を変更し「山下旅館別館」にチェックイン、村営バスで移動し松山遊歩道を歩き、  
村内を散策（グラウンド、古民家、図書館、100 円均一店、スーパーマーケット）、  
昼食は港の「よっちゃーれセンター」で刺身定食、その後宿に戻る
- ・ 6 日目 村営バスで黒島登山口に行き 9 時 40 分に天上山登山開始、先代池、裏砂漠、  
新東京百景展望地、不動池、最高地点、白島下登山口到着 13 時、  
昼食は「よっちゃーれセンター」で金目鯛煮付け定食、宿に戻る
- ・ 7 日目 11 時 30 分神津島発の大型客船で式根島に向かい、11 時 20 分式根島着  
民宿「清水屋」にチェックイン、電動アシスト自転車を借り、島内散策  
スーパーマーケット「みやとら」で“たたき丸”と弁当を買い、神引展望台で昼食  
唐人津城、地鉾温泉に入浴、足付温泉、山海温泉を見て松が下雅湯に入浴、宿に戻る
- ・ 8 日目 泊海水浴場に行き、11 時 25 分式根島発、横浜大栈橋に 18 時 00 分着、19 時頃帰宅

1 人当りの総費用は約 6 万 3 千円で詳細は以下に示す。

- ・ 交通費（1 人分）13000 円  
久里浜一大島 3260 円（35%株主割引適用）、大島一新島 1260 円、新島自転車 1000 円、  
新島一神津島 770 円（10%シニア割引適用）、神津島村営バス 200 円×6、  
神津島一式根島 550 円（10%シニア割引適用）、式根島レンタサイクル 1500 円、  
式根島～横浜 3460 円（35%株主割引適用）
- ・ 宿泊費（1 人分の 2 食付き費用）50360 円  
浜庄 7500 円  
山下旅館本館 9375 円（9000 円 夕食時の酒代 375 円）  
山下旅館別館 24335 円（1 泊目 12100 円、2 泊目 11000 円 夕食時の酒代など 1235 円）  
清水屋 9150 円（8500 円 夕食時の酒代 650 円）
- ・ 飲食や観光（1 人分 2 人でシェアしたものを 1/2 にした）11393 円  
伊豆大島スーパー寒川 2218 円  
新島のスーパー 800 円、新島カフェ 500 円  
神津島温泉保養センター 600 円、神津島博物館 300 円、神津島酒屋 1293 円、神津島スーパ  
ーまるはん弁当など 1019 円、神津島よっちゃーれセンターの刺身定食とビール 850 円（1  
食を 2 人でシェア）、神津島酒屋 1354 円、神津島チューハイなど 350 円、神津島サメジャー  
キー 250 円、神津島よっちゃーれセンターの金目鯛煮付け定食とビール 1350 円  
式根島みやとら昼の弁当など 830 円、式根島みやとらで買った夜の酒など 1033 円、

■ヨシメモ

ヨシさんはいつも手書きで旅行メモを書いている。それを掲載しておく。



【ヨシメモ】